

思えば遠くに来たものだ (臨床医としてのキャリアパスを考える)

長 島 久

私は、富山大学附属病院で副病院長・医療安全管理部長を担当しております信33の長島と申します。卒業してから約30年間は、信州大学及びその関連病院にて脳神経外科の臨床に携わってまいりましたが、2017年4月1日付で富山大学附属病院に移り、現在に至っております。

私には約200名の同級生がいますが、学生時代にあまり勤勉でなかった私が、還暦を超えた今も大学病院に在籍して、教官として活動を続けている姿を想像した者は、恐らくいなかったのではないかと思います。親元を離れた解放感と、新しく覚えた娯楽を通してできた友人達との交流に耽溺した私は、教養科目に馴染む間もなく、「校内ではあまり見かけない学生」の仲間入りをしていました。2年次の前期試験の段階で、語学の出席日数が不足して進級が叶わないことが判明した私は、その後も多くの科目を残して教養課程の3年目に突入しました。振り返って考えると、この経験を通して約2倍に増えた同級生が、その後の私にとって素晴らしい力となりました。一方で、周囲に対して常に尖っていた当時の私は、同級生たちにとっては何かと気を遣わなければならない、厄介な存在であったことと思います。そんな私が無事に卒業できたのは、相も変わらず「サボりがち」な私を笑顔で迎え入れ、試験等の際にも様々な情報を提供してくれた級友達の存在があったからでした。そして、留年を契機に、動物実験のお手伝いなどを通してできた(故)杉田虔一郎先生や小林茂昭先生をはじめとする脳神経外科学教室の先生方との交流の中で、脳神経外科を自らの進路と心に決めました。また、同じくご縁のあった勝山 努前松医学会長や本田孝行前附属病院長、中山 淳医学部長より組織・病理学的な様々な知識・技術をお教えいただく機会があったことから、脳腫瘍病理を専門としてゆくことを胸に、信州大学の脳神経外科学教室に入局致しました。その頃の私は、研修が修了したら臨床医として市中の病院に勤務することだけを考えており、自分が研究職や教育職としてキャリアを積む姿は全く想像もしていませんでした。

私にとっての最初の転機は、卒後3年目に赴任した長野赤十字病院にありました。長野赤十字病院の脳神経外科は、以前より新潟大学より医師が派遣されていたのですが、当時は信州大学の脳神経外科からも若手の医師が派遣される体制となっていました。一方で、(故)杉田先生が考案したオリジナルの手術手法を導入していた信州大学に対して、新潟大学の関連病院は世界的にも広く行われている一般的な手法を採用していたため、そこでの研修は若手にとって必ずしも要望を満たすものではありませんでした。そこで、部長であった(故)大塚 顕先生に、当時新潟大学脳研究所で盛んに行われていた先進的な脳腫瘍治療を念頭に置いて、夏休みを利用して新潟大学の関連病院だからこそ学べるものを学びたいと相談をしたところ、当時世界的にもまだ開発の途についたばかりの脳血管病変に対するカテーテル治療(脳血管内治療)のパイオニアの一人であった、新潟大学の小池哲雄先生をご紹介

いただきました。そして、当時の未熟な技術や器具で可能な範囲ではあるものの、大塚先生並びに新潟大学より派遣されていた諸先輩方のご指導をいただきつつ、僅かながらではありますが、その後も引き続き症例を積むこともできました。約2年間の同病院での研修終了後は、信州大学附属病院での脳神経外科の研修に戻りましたが、当時、信州大学の脳神経外科で脳血管内治療を担当していた先輩が教室を辞められたことから、私が脳血管内治療を担当することとなりました。幸いにして、小林茂昭先生始め諸先輩方のご配慮もあり、脳神経外科医としての研修も継続しつつ、脳血管内治療についても国内・国外で研修を積む機会をいただき、経験を重ねることができました。そして、気が付くと、当時はまだ最先端医療であった脳血管内治療を国内で牽引するメンバーの一員として、学会の創設や専門医制度の整備に関わるようになり、脳神経外科医としてメスを握る機会はなくなっていました。

その後、慈泉会（現社会医療法人財団慈泉会）相澤病院の相澤孝夫病院長（現理事長）のご厚意で相澤病院に脳血管内治療センターを開設いただき、わが国にはまだ希少な脳血管内治療の専門施設として、脳血管内治療の臨床と後進の指導に携わるとともに、学会の理事としてわが国の脳血管内治療の技術の向上や普及にも携わる機会をいただきました。一方で、臨床に携わる医師が、先進医療や高難度医療に携わるとともに、後進の指導にも従事し、同時にリスク管理も行うことの困難さや、発生したリスクに対応しつつ臨床を継続することの困難さを痛感する出来事も経験しました。特に、信州大学附属病院に脳血管内治療センターを開設頂き、准教授（特定雇用）として赴任した平成22年以降は、臨床に加えて後進の教育がより重要な課題となりました。その中で、臨床医としての視点を持ちつつ、臨床におけるリスク管理を行う専門家が必要という私の想いは確信へと変わり、幸い臨床については任せることのできる後輩に恵まれたことから、自分自身がそのような存在を目指そうと考えました。そして、いくつかの大学病院で発生した事故などの影響で、特定機能病院には医療安全管理を担当する専従の医師を置くことが義務付けられたことから、臨床医として残された10年間で、臨床医が安心して臨床に取り組める環境づくりを目指して、臨床を離れて医療安全の専門家となることを決意しました。

現在は、18歳で信州大学に入学して以来37年間、毎日のように眺めてきた北アルプスを反対側から望む富山の地で、臨床医としての最後の数年間を自らの夢の実現に向けて過ごしております。慣れ親しんだ信州とは気候だけでなく風土や文化にも大きな違いがある富山は、仕事の上でも大きく変わった日々を私に与えました。そして今学生たちに伝えているのは、「人生いろいろある中で、医師の生き方も様々」、「周囲（仲間）の助けに感謝して、与えられたチャンスは逃さない」、「常に自分を磨き、自分の可能性を広げる努力を続けていると、思わぬ景色が見えてくる」経験です。私の富山大学附属病院への異動は、3月7日に決定して4月1日には赴任となったため、信州を離れるにあたって、これまでにお世話になった皆様にほとんどご挨拶をすることができないままとなってしまいました。この場を借りて、これまでの私の人生に関わってくださった全ての方に心から感謝しつつ、拙稿を閉じたいと思います。

（富山大学附属病院 副病院長・医療安全管理部部長・教授）